

夢に向かって一歩ずつ進むこと！

●経営革新塾しよう会講演会／その3

20 日夜の認定 NPO 法人シーエスアールスクエア理事長の宍戸仙助様のご講演「リタイヤ後は、利他 Years！ ～東南アジアの山岳少数民族の子どもたちの輝く瞳に学ぶ～」の続きをどうぞ。



◆日本の先生方と児童生徒の現地視察による学び教える勇気と希望の再発見

【シーエスアールスクエアの facebook や公式 HP より一部引用】

8 月は 2 回ベトナムに行きました。前半（8/3-11）は、日本から小中学校の先生方を案内してのスタディツアー。後半（8/18-29）は、神奈川県鎌倉学園の生徒さん 9 人と先生 2 人を案内しての探求・交流ツアーでした。現地では本職の通訳が 1 名、それ以外はハノイ大学で日本語を学んでいる学生さんたちです。学生さんたちも山岳少数民族の地域には行ったことがありません。彼女たちにとっては生の日本語を学ぶいいチャンスなので学生さんたちを連れていきます。その学生さんたちに、「今回はありがとうね、お金は払えないけれども」と言って浴衣をプレゼントしたときの写真です。日本人の先生たちは、現地の民族衣装を着て写真を撮ったりしています。これ以外にも、小学校で運動会をやったり、一緒に遊んだりしてきました。



ラムビン郡、ミンクアン小学校バンドン校の視察[facebook より引用]



鎌倉学園の高校生を案内してのスタディ・探求ツアー



現地で通訳を担当してくださるハノイ大学の皆さん、宍戸様からのお礼は浴衣だそうです[Facebook 動画より引用]



◆子どもたちの輝く瞳の前に立って

現地の子供たちはこの笑顔なんです。私は、この笑顔の前に立ってしまったのです。それも現職の時、校長をやっている時でした。私、この笑顔を見ている間に、何でこんなに輝いていられるのだろうか、こんなにも貧しいのに輝いていられるのだろうか。この輝きを日本の子供たちにもう一度取り戻すことが、私が退職したあとの仕事なのかなあ……って、ポヤーンと思っていました。それを本格的にやらなければダメだと諭してくれたのが、東日本大震災でした。東京電力福島第一原子力発電所の爆発

でした。今の仕事は、あの東日本大震災がなかったらやっていなかったと思います。この笑顔を見てしまうと、また行きたい、また行ってあの笑顔を見たいと思うのですよ。

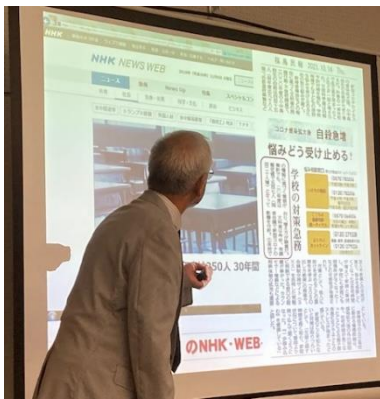
◆日本の子どもたち……不登校、いじめ、引き籠り、自殺……

さて翻って、日本の子どもたちを見てみましょう。2 年前（2021 年）の福島民報新聞ですが、「不登校最多 19 万人」という記事がありました。学校に行きたくても行けない子どもたちが 19 万人いるということです。今はもっといるかもしれません、コロナの影響もありますね。

「いじめ調査」は、ちょっと古いですがけれども小中学校で 30 万 9 千人。私にも娘が 3 人居て、その子たちが「いじめ」に遭うんじゃないかと随分心配しました。30 万 9 千人の子どもたちとご両親が辛く苦しい思いをしているのです。もちろん学校は必ず行かなくてはならない場所ではないかもしれませんが、でも、行きたくても行けない子どもたちの姿はやっぱり分かってあげなくてはしけないと思うのです。

2019 年 8 月 16 日 HNK「クローズアップ現代」では「中高年の引き籠り 61 万人」。少子高齢化するこの日本で 61 万人の人が働けないというのです。厚生労働省のホームページを見ると、今は 74 万人と出ていると思います。何とかしなければなりません。

これもちょっと古いのですが、文部科学省から各学校に配られた『教師が知っておきたい子どもの自殺予防』という本があるのですが、自殺者は交通事故者の 5.8 倍に達しているそうです。こんなに豊かで、こんなに恵まれている日本で、2019 年 11 月 4 日の NHK の Web ニュースに「児童生徒の昨年度の自殺者 250 人、30 年間で 3 倍になっている」と書いてあるのです。とんでもない、2021 年には 507 人になっていると文科省が発表しています。今年はずっと増えているでしょうね。福島県は特に高いのです。



私も福島県人ですが、東日本大震災の後に、あれほど大切にされて、お金をもらって自尊心、自己肯定感が高まったのですが、ところが後でお話する自己有用感が育っていないのだと思います。

ちょっと古く 2019 年ですが、15 歳から 39 歳までの死因のトップは「自殺」なんですよ。もちろん不慮の事故や悪性新生物（癌）でも亡くなっていますが、今、厚生労働省のデータを調べると 10 歳以下でも入っているのではないかと思います。この問題をなんとかしなければいけない。何が足りないのだろう、どうすればいいんだろうと考えました。

◆子どもたちにとって生きることは

2011 年 8 月 26 日の写真です。私は県職員でしたから 2011 年 3 月 6 日に異動の内示をもらっていました。ところが、あの地震、津波、そして原発事故で人事凍結が 4 か月続きました。そして 8 月 1 日に、内示と異なる学校、福島県伊達市立富野小学校へ転勤となり着任しました。この写真は、学校の敷地の外を歩く子どもたちの様子です。学校の中は表土を 10cm 削って、校庭の真中にプールより大きい穴をあけて、その表土を全部埋めました。8 月 26 日に登校する子どもたちは、マスクをかけて、帽子を被って、積算線量計を付けて、暑くても上着を着せさせられて登校する子どもたちです。この 300m 先は細い道路だったのですが、真ん中を歩いてくるのです。何故真ん中を歩いて来るのかと聞くと「お父さんやお母さんから狭い道は真ん中を歩きなさい」と言われているのです。それは側溝の放射線線量が高すぎるからなのです。学校の周りは歩道があって、側溝は除染されているので歩道を歩くことができるのですが、私は、この子どもたちの姿を見た時に思ったのです。

「この姿は、子どもたちが生きているとは言わない」って、命を繋いでいるだけだっと思ったのです。私は校長ですから校門の所で子どもたちを出迎えて、「おはよう、おはよう！」と大声で声を掛けるのですが、子どもたちはうつむきながら「おはようございます」と枯れるような声であいさつするだけなのです。

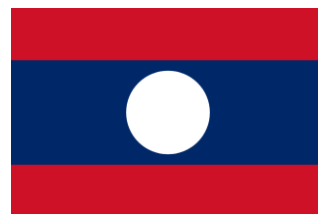
この姿を見た時に、これは子どもたちが生きているとは言わない。子どもたちにとって「生きるというのは、夢に向かって一步一步進むこと」、それが生きるです。その時の子どもたちは、ただ命を繋いでいるだけでした。私は、この子どもたちに少しでも大きな夢を持たせること、夢に向かって生きてもらうことをしようと思って 2 年間、ここで校長を務めました。



「QOL (クオリティ・オブ・ライフ quality of life)」とは、生活の質を高めるという言葉で医学の世界で良く使われます。これは大切なことですが、私は命さえあればいいんじゃないと思うのです。「QOD (クオリティ・オブ・デス quality of death)」、死ぬまで喜んでいられる。それが無いことが一番問題ではないかと思うのです。つまり、生き甲斐、生きる喜び、夢や希望なのです。たとえ何歳になっても夢や希望を持つことが「生きる」だと思ふのです。生きる質を高めることだと思ふのです。

◆ラオスの話

ここからは、ラオスの話をしたいと思います。小学校での出前授業のお話になりますが、日本とラオスの地図を見せて「何が違う」と問います。日本は海に囲まれているのですが、ラオスは内陸国で歩いて海外旅行ができる国です。ラオスの国旗は、横に赤青赤、中央に白丸を配した旗です。青は国の豊かさを象徴しているメコン川に昇る月です。上下の赤を小学校で尋ねると「イチゴ、トマト」「そういう色を国旗に入れるかなあ?」「夕日」「いいねえ。」「地面、土の色」「いいねえ！ラオスの土は赤いんだよ」と。実は、この赤は独立戦争で流された血の色なのです。60 年前までラオスはフランスの植民地でした。その植民地時代に内戦があって 60 万人が死ぬのです。その 60 万人のおかげで今のラオスがあるということを忘れないために血の色を入れています。実は血の色を入れた国旗はたくさんあります。隣のベトナムも真っ赤な旗の真ん中に黄色の星マークです。あれも血の白です。日本と仲の良いトルコも、真っ赤な旗の端っこに三日月と星マークです。あれは血の海に映った月と星を表しています。それぐらい血の色を国旗に入れた国があるのです。



これはラオスの小学校です。窓も床もないです。こんな学校を建て替えてあげることが私の仕事なのですが、新しい学校を建てると学区制がないので、みんな新しい学校に行ってしまうこともあるのですが、それを予想して先生たちも多く配置してもらえるように行政の人たちをお願いします。多めに机やイスの準備もしなくてはなりません。ノートや鉛筆も無いのですよ。机の上の数字はトウモロコシを並べています。《つづく》